

る時代がやっと訪れたわけなのであり、それがルネサンスなのである。

### 3 性交の相

生命的基調をなすものはむろん説話だけに見られるわけではない。第三章で詳しく論ずることになる魔術の知も、実のところこの生命主義の重要な一翼を担っている。第三章ではカンパネッラを主として扱うが、ここでは同時代のデッラ・ポルタに登場してもらって、彼が生命の根幹たる性や性交をどう捉えていたかを考察してみたい。

いきなり本論に入る前に、簡単に魔術とは何か（カ）に触れておくことにする。

#### 魔術の自然観

「魔術」という言葉は**ずいぶん誤解**されている。

おおかたの日本人はおどろおどろしいイメージをこの言葉から連想するであろう。妖術や呪術の類のいかがわしさがつきまといっているはずである。しかし「魔術」とは、自然に対する人間の知恵のことを言う。自然に対する人間の知の有り様なのである。「魔術」にはきまって人間の知が関わっている必要がある。人間の知と技が介在して対象（自然）に何らかの効果を与えるのが魔術なのである。

ここで問題となってくるのはむしろ、対象となる「自然」の方と言えよう。自然をどのように捉えるかによって自然観が立ち顕われてくるが、西洋の自然観の歴史の中での魔術の有する自然観をいちど考えてみておく方がよいと思われる。

きわめて大雑把な分類となるが、西洋文明の自然観には二種類ある。ひとつはキリスト教による自然観で、いまひとつは魔術による自然観である。この魔術という語もキリスト教が政治的に本流とみなされたがために異端としての名をふされたがゆえについた名でもあることを忘れないでほしい。

キリスト教は唯一絶対の神を持つ一神教であり、人間はこの神によって造られた被造物とされている。そして自然はこの人間のために造られた**棲家**なのである。したがってキリスト教では自然を觀察の対象として客観的に捉えて、自然界において人間だけが主体であるという人間中心の思想が生じる。自然は言ってみれば「物」であり、人間の支配や征服の対象なのである。自然は人間の意志と力によって自由に操作されうるものなのである。ここに自然開発の発想が生まれてくる。近代科学や科学技術はこの路線に沿って発展してきたのである。

一方、魔術の場合は以下のような具合になる。魔術は唯一神ではない。「一者」なる存在はあるが、生の根源としての一者であり、その下に第二、第三の神といったように、一者を光源（太陽）とすると、そこから地上（自然）へと神性を秘めた光が流れ出て、あらゆる事物に宿るのである。人間も含めた自然界の生物、事物すべてに神が宿り、人間は自然に内包された一部にしかすぎない。人間の方が自然を**棲家**とするわけである。したがって自然は人間同様「生き物」なのである。

キリスト教の自然観では自然は即物的で死せる存在であったが、魔術の自然観では、キリスト教のそれではよもや考えられぬような、万物に生命の根源たる神（一者）が宿り、自然は生ある有価値なものとみなされる。即物的で没価値な客観的对象として自然を凝視すると、それは観察という行為へと至って、自然法則や原理が発見されて近代自然科学が興ってくる。魔術からはそうした成果は期待できない。しかし自然は生き物なのであるということから自然保護の思想が生じてくる。

キリスト教の自然観の発展形態として近代科学成立の基礎となった機械論的自然観がある。これに対して魔術の自然観は一言で表現するとアニミズムの自然観と言えよう。

## 自然魔術の領域

冒頭に魔術は誤解されていると記したが、たいていの日本人の知る魔術が黒魔術であることにその原因があると言っても過言ではないであろう。

魔術には二種類ある。白魔術と黒魔術である。

白魔術は自然界を探究することを旨とする、自然に対する人間の知恵を主眼とした自然魔術のことである。これに対して降霊術などの不吉な魔術が黒魔術と呼ばれる。

繰り返しになるが、キリスト教の自然観を母体として生まれた近代自然科学の自然観は自然を即物的・没価値と見る機械論的自然観で、有機的生命自然観を採る魔術の自然観とは相対立することになる。ただそのなかにおいて自然魔術は、自然をあるがままに客観的に凝視しようとする姿勢に特徴があり、これはとりもおさず実験・観察を手段として用いることとなって、近代自然科学の方法論につながっていく。

しかし自然魔術師は実験・観察によって取得したものには満足せず、その背後に自然を統べる超自然的なものを求めようとして、自然の背後に隠されたもの（オカルト）は「隠す」を意味するラテン語の occultare の完了分詞 occultum に由来する）を追究しようとした。ここが近代自然科学の態度と決定的に異なる点で、やはり自然を各部に神（生命）の宿る生き物とみなしていた。

だが自然魔術の、自然に対する実験・観察の態度は、ガリレオなどが活躍した十六世紀後半から十七世紀前半の近代科学の勃興期（科学革命の時代）に大きな意味を持ったのである。

ガリレオと同時代の自然魔術師の代表的な人物に、ジャンバッティスタ・デッラ・ポルタなるナポリ人がいた。彼はガリレオより先に望遠鏡を発明したと言われている。そのデッラ・ポルタの主著に『自然魔術』全二十巻（一五八九年）がある。

いまその目次をちなみに載せてみよう。

- 第一巻 素晴らしい事柄の原因について
- 第二巻 さまざまな動物の生成について
- 第三巻 新しい植物の産出について
- 第四巻 家財を増やすために
- 第五巻 金属を変えることについて
- 第六巻 偽金作りについて
- 第七巻 磁石の不思議について
- 第八巻 驚くべき治療について
- 第九巻 女性を美しくすることについて
- 第十巻 蒸留について
- 第十一巻 芳香について
- 第十二巻 花火について
- 第十三巻 鋼鉄を強化することについて
- 第十四巻 料理術について
- 第十五巻 魚釣り、野鳥狩り、狩猟他について
- 第十六巻 不可視な筆記について
- 第十七巻 奇妙なレンズについて
- 第十八巻 静態的な実験について
- 第十九巻 空気作用による実験について
- 第二十巻 カオスについて

ことである。

さながら横断的知識のオン・パレードの感がある。ルネサンス期の博物誌であり、もっと身近な言葉で置き換えれば、小中学校の理科の教科書といったところであろうか。

生物の発生、発酵、金属、物理、医学、化学、光学、家事、美容など、自然魔術の扱う領域がいかに広範囲にわたっていたかが明らかにされている。

ここでは第二巻の「さまざまな動物の生成について」を中心に、自然魔術における性を考えてみたい。

## 性の原理

デッラ・ポルタは性をきわめて真剣に考えていた。現代の私たちから見れば遊び心と思える部分も、底には真面目さが流れている。

彼は性を発生——生殖と結びつけて捉えている。つまり生物の誕生を知るうえで性を研究している。これは生物（生命）創造の謎をなんとかして解き明かそうという積極的な顕われと言えるであろう。

まず動物や植物の生殖には性交・無性交の二種類があるとしている。

はじめに無性交から話を切り出していくが、彼は△腐敗△という独特な概念を提示する。「腐敗こそ、多様な単一体のみならず混合体も含めた新たな創造物を生み出す原理」だからである。

腐敗は一見すると生成の逆である。ところがこの逆の原理から（無性交で）生物が発生するのはどういうわけなのであろう。これには△湿△という特性が関与している。湿・乾・熱・冷という四つの特性が西洋では古代から信じられていて、発生にはこの中の湿が大きく関係すると言われた。それと四元素（火・水・空気・土）のうち△土△が関わりを持つとされた。

土は多くの場所で硬くて柔らかい状態に放置され、次に太陽の熱で乾燥、刺激を受け、ある種の液を出し、表面や最頂部が膨張した。この液の中に多くの腐敗物やある小さな皮で被われた土塊が含まれ抱かれている。この腐敗物が夜霧で湿り、日中は太陽に熱せられ、ある季節がすぎると熟成する。そして皮が破られてあらゆる種類の生物が出てくるのである。熱せられる速度が素早いとその生物は鳥になり、土棲のものは匍匐動物になり、水棲のものは海で魚になる。以上のものの中で中庸のものは、いわば歩行動物となる。

腐敗状態には水分があり、その湿気から無性交で生物が発生するというわけである。

たとえばネズミやカエルも腐敗から生まれる考えられた。エジプトの都市テーベの近くでは、ナイル河の氾濫が過ぎると太陽が地面を熱し、地面の亀裂が多く場所所莫大な数のネズミを送り出したという。また夏の夕立が海岸の砂に降り注ぎ、街道の塵がカエルを生み出すという。

ネズミやカエルの場合は、過度な熱と湿とが性交を助長したと思われるが、デッラ・ポルタはあくまで湿に原因を求めている。

この△湿△に関して、「自然魔術」に大きな影響を与えたアリストテレスの著作（「性交に関する諸問題」）の中に次のような一節がある。

……湿りは精液を大量に作り出し、熱さのほうは人間の本性を、精液を作り易いものにするのである。というのは、精液は、体内に保持されている限りは湿っていて熱い性質のものだからである。

何故男性は冬に、そして女性は夏に、性欲がいっそう亢進し易いのであろうか。或いはそれは、男性はどちらかというとその本性が熱くかつ乾いており、これに反し、女性は湿っていて冷たいからであろうか。したがって冬には、男性においては、その（本来的な）湿りと熱だけで性交に向かうのに十分間に合うが、ところが

女性においては（体内の）熱が一そう減少し、熱が欠乏しているために湿りが凝固してしまつて（性交が難しくなる）のである。

精液は熱と湿から生ずるのであり、湿なる季節において性交が盛んになるのである。ならば冬よりも夏場の方が湿なのではないかとの疑問が当然生まれてくるが、夏は多湿すぎてかえつてその機能が損なわれると考えられた。また同論文の中で性行為による快感（「攪り運動における快さ」）は、「自然に反して身体の中に閉じこめられていた気体化している湿りが外へ出て行くためである」とされている。

性交・無性交いずれの場合を問わず、生命的行為には湿が大きく関与していることが看取されたと思われる。

#### 性交の発想

次に性交（による発生）をどう捉えていたかを考えてみたい。

魔術はひとつの自然観だと前述したが、デッサ・ポルタは以下のようなことを述べている。

自然は生物を創造するうえでじつにまじめである。つまり最初に肉体の主要な部分の形を造り出し、次に自然によって作用される質料がゆとりを持てるように、緩急自在に自然は効力は発し、その中に己を形づくっていくのである。それによって以下の事実が判断されることになる。つまり質料に欠陥があるならば自然はそれを生み出さないだろう。また質料が過剰であるときには自然が抑制するものなのである。

そこで質料に欠陥があったり、過剰であったりする場合に、畸型が産まれる。

具体的には畸型は、第一に愛情のない性交が異常な性交によって引き起こされる。この場合は精子が適切な位置に運ばれないからだという。第二の原因は子宮が狭いときである。子宮の中に胎児が二人できてしまい、幅にゆとりがなく圧しひしがれるからだとされる。

このように畸型を産まず正常な児、いやそれ以上に美男美女を産むためにはどうすればよいのであろうか。

それにはこのような原理が考えられていた。つまり「行為の最中でも妊娠した後でも、また胎動を感じた後でも、生まれる子どもは懐妊中の母親が心に抱いていたのと同じ形を真似て生まれて出てくる」というものである。例を挙げてみよう。美男子の息子の母になりたがっていたある母親は、大理石に均整のとれた少年の白像を彫つて常に目の前に置いておいた。夫と交接しているときも、事が終わったあとも、そして妊娠したあとも、彼女はその像を見つめた。いよいよ子どもが生まれたとき大理石の像とひじょうによく似た息子を産みおとしたという。

この原理は魔術の基本的な原理のひとつである。共感の原理に基づいた発想である。心の中の想いが共感を得て外部に徴となって表面化するというもので、アナロジの原理とも言える。

次に男児（雄）と女児（雌）を産み分けるにはどのような方法があったかも述べてみよう。デッサ・ポルタは古代の哲学者が考察した例を交えながらいくつかの方法を列挙している。

- (1) 精子が強くて堅固ならば男児。流動的で脆弱で虚弱であるならば女児。
- (2) 身体の右の部分から出る精子は子宮の右の部分に誘導される。同様に左の部分から出された精子は子宮の左の部分に入っていく。このコースが守られている場合には男児。逆転した場合には女児。
- (3) 性交の際に優勢であった方の性を得る。精子がきわめて有力である場合は男児。胎内で受けとる栄養が精子のそれを凌ぐものならば女児。
- (4) 右側というものは大いなる熱を有しているので、女性が子宮の右側に精子を受け留めると男児。左側ならば女児。たとえば雄牛が雌牛に交尾の後、右側から跳び降りれば雄が、左側からだ雌。また、雄を

欲しい場合には交尾のときに左の睾丸を結び絞める。雌ならば右側をしぼる。

(5) 北風の方が非常に強いと雄。朝方に交尾すると雄。雌が欲しいときは南風が吹いたときに交尾させる。吹いたときには交尾の最中鼻先を南に向けさせる。雄が雌にかかったときに二頭をすぐに南に向かせる

と雌。

強・右・北が男児（雄）を産み出し、弱・左・南が女児（雌）を産み出す起因ということになる。

このような発想をみると男がどのように考えられ、女がいかような位置にあったか推察できよう。男性中心の、右側を尊重する文化だということである。

女性については『自然魔術』第九巻に「女性を美しくすることについて」があって、髪染め方、カールの仕方、化粧をはじめとする美容術、しわの除去、歯みがき粉などについてのハウトゥーが並べられているが、その中にへ処女を失った女性が再び処女を得る方法Vなるものが教授されている。

これは根本に処女再生の発想であり、出血の有無が処女であるかないかの決め手とされている。四つの方法が述べられている。

(1) 焼いた明礬、乳香、加うるに硫酸塩と石黄を、手で触れても判らないほどなめらかな粉末にする。そして雨水でビルに仕立てて、指で強く押し込んで薄くして乾燥させる。次に最初に破られた子宮の口にあてがう。雨水でその場所を常に湿布しながら六時間おきにビルを交換する。二十四時間で至るところに小瘡ができる。触れると処女とほとんど区別つかない多量の出血がある。

(2) 子宮の口にヒルを置く。ヒルはかさぶたをつくるからで、かさぶたが破れると流血する。

(3) 患部を引き締めて野ウサギやハトの乾燥させた血を注射する。子宮の湿り気で湿って、鮮血のように見える。

(4) 一酸化鉛を上手に粉末にして、酢が濃くなるまで酢の中で煮る。それを濾して色がつくまでさらに酢につける。そして火にかけて酢を蒸発させる。残った粉末を湿布としてあてがう。

当時やはり処女性が尊重されていたことがよく理解される。

#### 自然にやさしい性

以上、自然魔術師デッラ・ポルタが考察した性について見てきたが、彼はきわめて真面目に性を考えていることが判ったと思う。

彼は生殖——生成、つまり出産（生命の誕生）というところに多大なる関心を寄せ、それを考察の対象とした。避妊を論じている箇所などなく、もっぱら性を生る方向において捉えている。体位などを記した項目などあってもよいのだが、なぜか見当たらない。

しかし好色な人間の叙述はあり、それはデッラ・ポルタの別の著書『人間の相貌について』全六巻（一五八八年）において見られる。

『人間の相貌について』第二巻第五章「脚について」で、

ほっそりして肉のない脚を持っている人はみな好色である。これは鳥にもあてはまる。……ほっそりして筋肉質の脚はヴィーナスの加護を受けているが、それは湿なる栄養をすべて精子に変えるためだからだ……私は、鳥やバツタのような細い脚を持った友人がたくさんいる。こうした動物に似て彼らは並はずれた飽くなき好色漢である。

さらに第三十七章「恥部について」では、「女陰部がゆるんでいるのは若い女性に見られるような、欲望に燃

えている状態なのである。性欲をむき出しにしたら、多弁になったりする。性欲にかられるのはクリトリスに原因があるという<sup>1)</sup>と述べられている。

総じてデッラ・ポルタに代表される自然魔術の性は「自然」に忠実で優しいということである。生き物としての自然という、魔術の思想の根本原理に則った性、生命主義的な性が見受けられる。

このように、反中世、反近代的発想が期せずして生命主義の顕現となっていることが見て取れたと思う。ルネサンスという言葉葉じたいが「再生」、つまり「繰り返し返された誕生」の意味であり、そこに「生まれる」意味がこめられていることから、生命が基調音となることになんら不思議はないのである。